



EXTON

Hybrid

MAHLER

Symphony No.1 "Titan"

MANFRED HONECK

PITTSBURGH SYMPHONY ORCHESTRA



SUPER AUDIO CD

HIGH QUALITY

HQ

Super Audio CD



Photo: Jason Cohn

マーラー

GUSTAV MAHLER (1860-1911)

交響曲 第1番 二長調「巨人」

Symphony No.1 in D major "Titan"

1	1 Langsam. Schleppend. Wie ein Naturlaut.	17:14
2	2 Kräftig bewegt, doch nicht zu schnell	8:28
3	3 Feierlich und gemessen, ohne zu schleppen	11:16
4	4 Stürmisch bewegt – Energisch	21:01

ピッツバーグ交響楽団

PITTSBURGH SYMPHONY ORCHESTRA

マンフレッド・ホーネック (指揮)

MANFRED HONECK (conductor)

2008年9月26-28日 ピッツバーグ、ハインツ・ホールにて収録

Recording Date: 26-28 Sep. 2008 (Live Recording)

Recording Location: Heinz Hall, Pittsburgh

Mixed and Mastered at EXTON Studio, Yokohama

Made possible by a generous grant from BNY Mellon

TOTAL TIME : 57:59

解説

宇野 功芳

これは指揮者とディレクターが綿密な打合せを繰返しながら成しとげた、一つのすばらしいレコード芸術である。オーケストラというものの迫力、色彩感、各楽器のソロや合奏やかけ合い、そして何よりもダイナミック・レンジの広大さは、録音自慢のエクストン・レーベルでもかつて見ないほどの域に達している。再生装置が優秀であればあるほど、このCDは威力を発揮し、楽しめるだろう。どんなにフル・オーケストラが最強音で鳴ってもうるさくならず、体を直撃する風圧とパワーはただごとではない。

従ってマーラーの拡大されたオーケストレーションがこんなに見事に捉えられた前例はなく、指揮者の意図が100パーセント音化されている。それにしても昨年9月にホーネックが音楽監督に就任したばかりのピッツバーグ交響楽団のうまいこと！もちろんホーネックの統率力によるものであろう。

第1楽章の冒頭は超ピアノシモ、少し弱すぎるのではないかと思う間もなく、舞台裏のトランペットがすばらしい雰囲気とともに聴こえ、クラリネットのカッコウが鮮やかに鳴る。主題を奏するヴァイオリンのデリケートなニュアンス、それはみるみる盛上り、凄まじい底力

の最強音にふくれ上ってゆくのだ。展開部におけるフルートとクラリネットによるカッコウ動機のからみ合いの美しさ、その先のフルートの生きていること、ピッツィカートの意味深さ、大柄なリタルダンド、光彩陸離たるトランペットやトリルを吹くホルンのものすごさ、本当にマーラーを堪能できる。

第1楽章の基本テンポは遅めだが、第2楽章も同じで、オケをじっくり鳴らし、リズムを踏みしめる。ホルンの伴奏動機を強調する楽しさや遠近感の見事さ、それを最高に捉え切った名録音、本当にどれほどほめてもほめすぎることはない。

中間部もヴァイオリンの音色変化やロマンティックなルパートをはじめとして、各楽器の立体感はその比を見ず、チェロの主旋律を伴奏するフルートなど、こんなに面白い演奏は今までに無かった。

第3楽章からフィナーレにかけても音楽的に一分の隙もないが、やはり終曲の凄絶さがずばぬけている。エクストンがその技術をフルに発揮し、全力をふりしぼって熱演するオーケストラの風圧をハッシとばかり受けとめたのだ。マーラー・ファン、オーディオ・マニア必聴の名盤登場である。

(うの・こうほう)

曲目解説

吉井 亜彦

グスタフ・マーラー(1860-1911)の最初の交響曲は、現在のようなかたちになるまでには若干の紆余曲折を経てきている。まず、この作品はかなり長い年月をかけた結果、1888年にブダペストで一応完成された。当時、マーラーはブダペスト王立歌劇場の指揮者として、この地に滞在していたのである。作曲の翌年、この作品は作曲家自身の指揮によって初演されているが、そのときは「2部からなる交響詩」とよばれており、全体は5つの楽章より構成されていた。そして、その2部には、それぞれ第1部「青春の日々から。花、果実、そしていばらなど」、第2部「人間喜劇」という標題がつけられていたのである。初演の結果は特にかんばしいというほどのものではなかったという。その後、若干の手が加えられ、今度は全体が4つの楽章からなる「交響曲」として、あらためて発表されることになった。

あらたに手が加えられた版をワイマルやハンブルクでとりあげたとき、マーラーはこの作品に「巨人」というタイトルをつけた。これは、作曲家が少し以前に愛読していたジャン・パウルの小説《巨人(Titan)》に由来している。当小説はジャン・パウルの代表作とすべき大作で、主人公アルバーノが次第に成長し

ていく過程が描かれており、ビルドゥングス・ロマン(教育小説)のひとつということができよう。その後、このタイトルはとりはらわれてしまったのだけれど、現在でもマーラーの交響曲第1番は《巨人》の名で親しまれることが(とりわけ、わが国において)少なくない。

全体は次の4つの楽章よりなっている。

第1楽章 それぞれドイツ語で、「ゆっくりと、ひきずるように」と記された序奏と、「きわめて落ち着いて」と記された主部とからなる。朝があけるように序奏が始まり、いかにもマーラーならではのこっごうの声か4度下降(3度ではなく!)できこえ、速くでファンファーレもきこえる。主部はソナタ形式によっている。まずチェロで示される第1主題は、マーラーの歌曲集《さすらう若人の歌》の第2曲に基づくものだ。やがて出る第2主題は、それと対位法的に関連している。展開部では、これら両主題のほか、序奏部の動機なども有機的に織りこまれて、全体の緊密化がはかられている。この作曲家ならではの奥ゆきある情感と、彼がはやくから身につけていた卓越したオーケストレーションとが、新鮮な寄りそいかたを見せている楽章といえるだろう。

第2楽章 「力強く動いて、だが速すぎずに」と記されている。3部形式によるスケルツォである。低弦の4

度のオスティナートに始まり、やがて活発な主題を導いていく。民族舞曲的な性格を強くもっている。これは彼の歌曲とも浅からぬ関連を示す。イ長調のスケルツォに対し、トリオはヘ長調のゆるやかなワルツで、後半はト長調になり、対照的ともいえるようなどかな牧歌的雰囲気を描きあげている。やがてスケルツォが再帰するが、ここではやや短縮されている。

第3楽章 「厳肅にそして莊重に、ひきずらずに」と指示されている。3部形式による独特な葬送行進曲。ティンパニの奏する4度の動機にのって、コントラバスから順にカノンふう主題が扱われていく。この主題は南ドイツを中心にひろくうたわれていた民謡《マルティン君 (Bruder Martin)》からとられた。この民謡はごく小さな子供でもよく知っているほど親しまれていたという。マーラーはこの葬送行進曲を1枚のエッチング《狩人の葬送》から着想を得たともいわれている。中間部はやはり彼の歌曲集《さすらう若人の歌》の第4曲と関連を示している。

第4楽章 「嵐のように激動して」と記されており、前楽章から切れめなく続く。きわめて自由なソナタ形式によっているということもできるし、また、全体が大きく3つの部分からなっているようにもみることができる。強

烈なオーケストラの咆哮に始まり、ふたつの対照的な性格の主題を中心に起伏に富んだ展開をくりひろげ、第1楽章の主題的関連も示しながら、圧倒的昂揚のうちに全曲を終えていく。

(よしいつぐひこ)

マーラーの交響曲第1番について

マンフレッド・ホーネック

19世紀の作曲家で、グスタフ・マーラーほど指揮者に細かい指示を与えた作曲家はいません。なぜでしょうか？主な理由は、マーラー自身が大変優れた指揮者であったということですが、それ以上に、マーラーが楽譜を自身の高度な芸術的基準にまで達するよう努めただけでなく、実際の演奏までもそのようなレベルに達することを望んだからなのです。しかし、マーラーが書き記さなかったこともあるのではないのでしょうか？

マーラーが最初の交響曲において、どれだけたくさん新しい今までにない革新的な要素を示したかは目を見張るものがあります。マーラー以前の作曲家では誰もし得なかった——あのベートーヴェンでさえもです。実際にはソナタ形式で書かれなかった第1楽章の展開部や、パロディとして意図された第3楽章のコントラストのソロや田舎くさい音楽を思い出してください。マーラーはボヘミアの小さな村に生まれ育ち、ウィーンという多重民族帝国における多様な文化の増城である首都が、彼が音楽を学び人格を形成する場所となりました。このような環境でマーラーは生活し、働き、それ故に彼が自身の音楽の中でボヘミアとウィーンという二

つの文化からそれぞれの特徴を融合していったのは明白です。私がオーストリアの民俗音楽を研究した際（私の父はボヘミア地方出身の家系ですが、ツィターを学ばせてくれたのです）、そこからたくさん「マーラーらしい」要素を見つけました。その後、ウィーン・フィルのヴィオラ奏者として素晴らしいウィーンの音楽を演奏することができ、私のマーラーとの関係性は深まってきました。

そう考えると、親愛なる聴衆の皆さまが、「ウィーン＝ボヘミア」的な特徴を強調するだけでなく、時にマーラーの奇抜とも思える部分を際立たせるように演奏する解釈があっても、驚かれないはずですよ。とりわけ第2楽章は私にとって通常のワルツでもなければレントラーでもありません。メンゲルベルクが楽譜に書き込んだように（メンゲルベルクがマーラー自身から個人的に教えてもらったことのように）、これは粗野な土くさい田舎の踊りなのです。私の考えでは、テンポを自由自在に変化させる伝統的な「ウィーン＝ボヘミア」風な音楽と、3拍子の2拍目が少し早めに入る典型的なウィーン風ワルツのリズムがこの第2楽章で特別な役割を果たしているのです。マーラーにとってこのように演奏することを楽譜に書き記す必要はありませんでした。なぜならマーラーの時代の音楽家たちは習慣として無意識にここで要求されていることができたからです（お

そらく、このような理由もあって多くの吹奏楽団やサロン・オーケストラで演奏することも多かった当時の音楽家たちがマーラーの音楽を受け入れなかったのかもしれませんが。彼らの目にはベートーヴェンが作り上げた交響曲という「神聖な」ジャンルが侮辱されたように映ったのでしょ。う。

ここに、皆さまがこの録音を楽しんで聴いて下さることを願って止みません。

ピッツバーグ交響楽団

100年以上にわたり、ピッツバーグ交響楽団(PSO)はピッツバーグの文化の中心として、重要な役割を果たし、同時に国際的に高く評価されている楽団である。PSOが誇るのはオーケストラ自体の優れた芸術性、世界一流の指揮者・音楽家との豊かな歴史であり、そしてピッツバーグという地域との密接な関係である。

これまでPSOを率いてきた指揮者陣の筆頭として、初代首席指揮者のフレデリック・アーチャー(1896-1899)と音楽監督をつとめたヴィクター・ハーノルト(1898-1904)が挙げられる。エミル・ノバル(1904-1910)、エリ阿斯・ブリスキン(1926-1930)、アントニオ・モダレッリ(1930-1937)の時代を経て、1930年代後半、アメリカのオーケストラとして結束するにあたり重要な役割を果たしたのがオットー・クレンペラーである。そしてフリッツ・ライナー(1938-1948)の指揮の下、オーケストラの歴史の新たな段階に入る。

1952年から76年、後半世紀に及ぶウィリアム・スタインバーグが音楽監督をつとめた刺激的な時代には、PSOは常に高水準のレベルを維持しさらに発展させている。アンドレ・プレヴィン(1976-1984)はツアー、録音そしてテレビ放送を通じてオーケストラを新たな高みへと導き、1984年にミュージック・コンサルタントと

してPSOとの関係が始まったロリン・マゼールはその後、音楽監督となり(1988-1996)、PSOを世界でもトップクラスの優れたオーケストラへと育て上げる。1997-2004年に音楽監督をつとめたマリス・ヤンソンスはオーケストラの芸術性をさらに深化させ、ヤンソンスの辞任にあたり、PSOはアンドリュウ・デイヴィス(アーティストック・アドヴァイザー)、ヤン・パスカル・トルトゥリエ(首席客演指揮者)、マレク・ヤノフスキ(客演指揮者)という革新的な三頭体制をとる。2007年1月までこの体制を維持し、2008-2009年のシーズンより、マンフレッド・ホーネックが音楽監督として一時代を築くことが決定した。

PSOは国内・海外を問わず長きにわたってツアーの実績も著しい。PSOは20世紀前半から始まるツアーの歴史を通して評価を確立し、世界クラスのオーケストラとしての地位を不動にしてきた。1947年メキシコツアーを皮切りに、ヨーロッパ・ツアー18回、アジア極東地域7回、南米2回を含む通算30回以上となる海外ツアーを敢行している。世界各国の聴衆との交流の中で、教皇の25周年祝典の一環として、PSOはアメリカのオーケストラとしては初めて、2004年1月バチカンにおいて故オハネ・パウロ2世の前で演奏を行った。

同様に国内ツアーの実績にも優れ、長年にわたり、あらゆるアメリカの主要都市と音楽の中心地においてオーケストラの演奏を披露している。

録音・放送の分野においても多彩かつ継続的な活動・実績を誇り、1936年以来全米に演奏が放送。1982年にはピッツバーグのWQED-FM89.3制作によるPRIの一連のネットワーク・ラジオ放送によって、高い注目を得ている。

1941年に初めて録音が発売されて以来、PentaTone、EMI、Angel、CBS、Philips、MCA、New World、Non-esuch、Sony ClassicalやTelarcなどのレーベルのもと、優れた批評や評価を得ている録音が数百にも及ぶ。今後は日本のレーベル、EXTON/オクタヴィア・レコードとの緊密な録音プロジェクトも予定されている。

歴史の長いハイツ・ホールを拠点に、PSOは年間24週行われるクラシック・コンサートを含む定期演奏会、年間7回のウィークエンド・ポップス・コンサート、フィドルスティックス・ファミリーコンサート・シリーズを行っている。数々の地域との社会活動や提携演奏会が西ベンシルベニア、ウェストバージニア、メリーランド州において定期的に行われている。ハイツ・ホールでの学生向け無料演奏会、アレゲニー・カウンティ公園でのサマーコンサートなどを含む教育活動も活発で、それらの教育活動が認められて2007年PSOはバンク・オブ・アメリカとメットライフ生命両方からの賞を授与された初のオーケストラとなった。

マンフレッド・ホーネック(指揮)

オーストリア生まれ。ウィーン音楽院で学ぶ。10年間以上にわたってウィーン・フィルハーモニー管弦楽団とウィーン国立歌劇場の楽団員として活動したことが、ホーネックの指揮に独特な特徴を与えている。

ウィーン、グスタフ・マーラー・ユーゲント・オーケストラにおいてクラウディオ・アバドのアシスタントとして指揮のキャリアをスタート。引き続きチューリヒ歌劇場にて指揮活動する中、1993年同地にて名高いヨーロッパの指揮者賞を与えられる。1997年ノルウェー国立歌劇場の音楽監督に就任、1年間過ごす。

1996年から3年間MDRライプツィヒ中部ドイツ放送(MDR)交響楽団の主要指揮者の一人となる。ヨーロッパツアーの大成功をきっかけにオスロ・フィルハーモニー管弦楽団と良好な関係を築き、同オーケストラの首席客演指揮者、その後2000-2006年スウェーデン放送交響楽団の音楽監督を歴任。

2007年シュトゥットガルト州立歌劇場の音楽監督に就任が決まり、2008-2009年シーズンからチェコ・フィルハーモニー管弦楽団の首席客演指揮者、また同シーズンより第9代ピッツバーク響音楽監督として就任する。

客演指揮者として、バイエルン放送響、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管、シュターツカペレ・ドレスデン、ロイヤ

ル・コンサートヘボウ管、ロンドン・フィル、フランス放送フィル、チェコ・フィル、ウィーン・フィル、またアメリカでもシカゴ響、ロサンジェルス・フィル、ワシントン・ナショナル響、ボストン響など世界のメジャー・オーケストラと共演。

オペラ劇場としては、ドレスデン・ゼンパー・オパー、ベルギー王立モネ劇場、コペンハーゲン・デンマーク王立オペラなど指揮。サンクト・ペテルブルクの白夜祭、ザルツブルク音楽祭にも出演している。

Remarks on Mahler's Symphony No 1

No composer of the 19th century has furnished the conductors with such specific instructions as Gustav Mahler. Why is that? Mainly because he was an excellent conductor himself and moreover because he wanted not only the score to measure up to his precise artistic standards, but especially the actual performances. But are there possibly things he did not write down?

We marvel at how much of the novel, unheard, and revolutionary Mahler introduces in his very first symphony. No other composer before him did that, not even Beethoven. Think of the development of the first movement which is not really written in the sonata form, the double-bass solo and the vulgar music of the third movement which is designed as a parody. Mahler hailed from a little village in Bohemia and received his musical education and conditioning in Vienna, the multicultural capital of the multiethnic monarchy. In this environment he dwelt and worked, and so he obviously integrated specific features of both these cultures, the Bohemian and the Viennese, into his music. When I occupied myself with Austrian folk music (my father whose family came from the Bohemian region allowed me to learn the zither) I could find many elements of "Mahlerian" spirit therein. Later, when as a viola player in the Vienna Philharmonic I was able to perform the wonderful

Viennese music, my relationship with Mahler deepened.

So it should not be a surprise that you, dear listeners, will notice an interpretation with an emphasis not only on the Viennese-Bohemian, but also on the outrageous element which is performed in a slightly sharpened fashion. The second movement in particular is not a normal waltz or ländler for me. Like Mengelberg wrote into his score (and this is supposedly something he got from Mahler personally), this is a raunchy peasants' dance. In my point of view the traditional viennese-bohemian way of making music with its flexible tempo modifications and the typical rhythm of the Viennese waltz with the early second beat play a special role here. For Mahler there was no necessity to note this way of playing in the score as the musicians of his time automatically knew what was required. (This might actually be one of the reasons why many of those musicians, who also performed in the numerous brass bands and salon orchestras, disapproved of his works. In their eyes the "holy" genre of the symphony in the spirit of Beethoven was dishonored, so to speak.)

On this note, I hope you will enjoy listening to this recording.

Yours,
Manfred Honeck

Mahler's First Symphony by Stephen E. Hefling

Gustav Mahler was born on 7 July 1860 at Kalischt, near Iglau (now Kališřtě, near Jihlava) in Bohemia, a province of the Austrian Empire now part of the Czech Republic. Although Mahler may have begun work on the First Symphony as early as 1885, most of it was written quickly in Leipzig during February and March of 1888. The composer himself conducted the disastrous premiere of the work, then entitled "Symphonic Poem in Two Parts," in Budapest on 20 November 1889. Mahler made substantial revisions between 1893-96, and subsequently retouched the orchestration in 1906 and again in 1910. In its final casting the symphony calls for the so-called Wagnerian quadruple-wind orchestra with expanded brass complement: four flutes (two of which double on piccolo), four oboes (one doubling on English horn), four clarinets (two doubling on E^b clarinet and bass clarinet respectively), three bassoons (one doubling on contrabassoon), seven horns, five trumpets, four trombones, tuba, harp, timpani (requiring two players), bass drum, cymbals, triangle, tam tam, and the usual strings. Mahler also indicates that in the finale the first and second trumpets plus the E^b clarinet are to be reinforced by "at least" one additional player.

No musician after Beethoven did more to expand and invigorate the symphonic repertoire than did Gustav Mahler (1860-1911)—both as composer and as an internationally acclaimed conductor. With seeming impudence, Mahler famously predicted that "my time will come," intimating that one day his symphonies would approach the status of Beethoven's. And slightly more than a century after his birth, the 'Mahler renaissance' of the 1960s proved him right. As we approach the double anniversary years 2010-11—Mahler's 150th birthday and the centennial of his death—the powerful resonance between his music and our time only grows stronger.

"My music is lived": repeatedly, to those whom he trusted, Mahler revealed through various metaphorical descriptions that composition and personal experience were inseparably intertwined for him. There is no clearer instance of this than the First Symphony. Mahler was passionately but hopelessly in love as he composed the work at white-hot speed in about six weeks. His muse was Marion von Weber, wife of the famous composer's grandson: her "musical, luminous being of highest aspiration," Mahler later recalled, inspired him to resume his creative work, which he had all but abandoned during the hectic, frustrating years he spent in provincial theaters to establish himself as a conductor. Thus, the First reflects the passions,

ecstasy, and bitter frustration of its youthful musical persona—"the hero," as Mahler referred to him. Beginning in 1900, Mahler withheld all 'programmatic' commentaries on his works from the public, both to avoid possible misunderstandings and to dodge the ridicule of the critics. But today, if they are not taken too literally, Mahler's remarks can offer "a star map with which to comprehend the night sky," as he once put it.

Four such star maps survive for the First Symphony, which are condensed and incorporated into what follows. As noted, the 1889 Budapest premiere had been a flop ("my friends avoided me, and I went about as though diseased or an outlaw," the composer later admitted). Accordingly, for the second and third performances in 1893-94, Mahler decided to offer his listeners more clues. The title became "'Titan,' a Tone Poem in Symphony Form," in two parts. Mahler evidently had in mind a powerful, somewhat naive young hero, his life and suffering, and his struggle and defeat by fate. Part one, "From the Days of Youth," begins with the first movement, "Spring without End.' The slow introduction, according to Mahler, represents the awakening of nature after a long winter's sleep; the long-held A harmonics suggest the sunlight of the summer day shimmering and glimmering through the branches. In the course of the movement, Nature, as though revealing herself making music,

grasps us with her radiance, and also with her uncanny mysticism. Both the hero and we are swept forward by Dionysian jubilation (the roaring energy of Dionysus, god of wine), which is as yet completely unbroken and untroubled. Overall, the movement is an expanded variant upon traditional sonata form. The main theme that follows the slow introduction comes directly from the second of Mahler's *Songs of a Wayfarer*, "This Morning I Went Out Over the Field." But as the development progresses, a powerful conflict unfolds. Just when a tragic outcome seems all but inevitable, a bold and brilliant fanfare for brass and winds suddenly and decisively changes the course of the drama from impending darkness to yet greater jubilation: this is the first instance of the Mahlerian 'breakthrough,' a tactic he would use frequently in the future. At the close of the movement, where the tympani have the theme, Mahler imagined that the hero—or, in one account, Beethoven!—bursts out laughing and runs away.

The original second movement was an Andante entitled "Blumine" (meaning approximately "lora"), which was rediscovered in 1967—a sentimental, rapturous love episode. In 1888 it was actually a birthday gift for Marion von Weber, inscribed "from M to M." Following the symphony's third performance (1894), Mahler deleted "Blumine" (and all of his descriptive movement titles for the

symphony). Claiming that the discarded Andante was not sufficiently symphonic, he jocularly derided it as the hero's "youthful asininity." Nevertheless, "Blumine" is still occasionally performed and recorded today, both separately and in the context of the First Symphony.

In the ensuing scherzo (now the second movement), which Mahler entitled "In Full Sail," Mahler suggested that the young man comports himself in a more powerfully masculine, robust, fit-for-life manner. He also likened the movement to a bridal procession expressing boundless joy and delight.

Part two, "Commedia humana" ("The Human Comedy"), begins "Aground," when the hero has 'found a hair in his soup.' Extrinsicly, one could picture the proceedings as follows: A funeral procession passes by the hero, and he is seized by the complete misery and abject sorrow of the world, with all its lacerating contrasts and ghastly irony. The external inspiration came from a children's fairy-tale illustration, "The Hunter's Funeral Procession," in which animals of the forest in farcical postures accompany the coffin of the deceased hunter to the grave. The opening children's tune, "Bruder Martin" (known to us as "Frères Jacques"), is transformed into a minor-mode funeral march introduced by a solo string bass—an unheard-of audacity at the time.

According to Mahler, this music should be imagined as though played torpidly by a miserable provincial band (just the way they played at funerals). In the midst of it we hear the coarseness and banality of the world in the sounds of an intermingling Bohemian amateur ensemble. The movement's placid 'trio' interlude is, once again, directly derived from Mahler's *Wayfarer* cycle—in this case from the final song, at the point where the poetry, which is Mahler's own, welcomes death as release from turmoil:

On the street stands a linden tree,
There for the first time I rested in sleep!
Under the linden tree!
It scattered its blossoms over me.
Then I knew not how life goes on,
Everything was good again!
Everything! Love and sorrow!
And world and dream!

The irony becomes especially sharp after the interlude, when the funeral band returns from the burial and strikes up the customary 'merry tune,' which here cuts through to the marrow. This bizarre music either completely baffled or totally outraged the early hearers of Mahler's First. Yet the more savvy of Mahler's contemporaries as well as audiences of the later twentieth century came to recognize it as one of Mahler's boldest steps in the expansion of musical expressivity.

Immediately follows "Dall' Inferno" (Out of hell), like the sudden, terrifying scream of a heart wounded to the quick: the hero, according to Mahler, is abandoned to the most fearful struggle with all the sorrow of the world. Again and again when he seems to have raised himself above destiny and to have become master of it, he is hit on the head by Fate, as also is the motive of victory with him. Only first in death does he achieve the victory, having conquered himself and his lost illusions (which are evoked by the return of themes from previous movements, as though the sun suddenly emerged after a stormy night). He rises anew and triumphs because he has succeeded in creating his own inner world, which neither life nor death can take away from him. Then follows the magnificent victory chorale!

©2008 Stephen E. Hefling

PITTSBURGH SYMPHONY ORCHESTRA

For more than 100 years, the Pittsburgh Symphony Orchestra has been an essential part of Pittsburgh's cultural landscape, and a highly regarded international ensemble. The PSO prides itself on artistic excellence, a rich history of the world's finest conductors and musicians, a strong commitment to the Pittsburgh region.

Heading the list of internationally recognized conductors to have led the PSO is Victor Herbert, Music Director between 1898 and 1904, who influenced the initial development of the PSO. Preceding Herbert was Frederic Archer (1896-1899), the first Pittsburgh Orchestra Conductor. Critical to the Orchestra's solidification as an American institution in the late 1930s was Maestro Otto Klemperer. Conductors prior to Klemperer were Emil Paur (1904-1910), Elias Breeskin (1926-1930) and Antonio Modarelli (1930-1937). From 1938 to 1948 the Orchestra embarked on a new phase of its history under the dynamic directorship of Fritz Reiner.

The PSO's high standard of excellence was maintained and enhanced through the inspired leadership of William Steinberg as Music Director between 1952 and 1976. André Previn (1976-1984) led the Orchestra to new heights through

tours, recordings and television. Lorin Maazel began his relationship with the PSO in 1984 as Music Consultant but later served as Music Director from 1988-1996, molding the PSO into one of the finest orchestras in the world. Mariss Jansons served as Music Director from 1997-2004, and upon his departure, the PSO created an innovative leadership model with Artistic Advisor Sir Andrew Davis, with Principal Guest Conductor Yan Pascal Tortelier and Endowed Guest Conductor Chair Marek Janowski. These three conductors were the primary artistic leadership for the Orchestra until January 2007, when the PSO selected Austrian conductor Manfred Honeck to take the podium as Music Director at the start of the 2008-2009 season.

With a long and distinguished history of touring, both domestically and overseas, the PSO has earned critical acclaim for each tour abroad beginning in the early 1900s, solidifying its ranking as a world-class orchestra. Beginning with a 1947 appearance in Mexico, the Orchestra has made more than 30 international tours include 18 to Europe, seven to the Far East, and two to South America. Reaching a global audience, the PSO was the first American orchestra to perform at the Vatican in January 2004 for the late Pope John Paul II, as part of the Pontiff's Silver Jubilee celebration. The Orchestra also enjoys an equally

distinguished record of domestic tours, which over the years have showcased the orchestra in all of America's major cities and music centers.

The PSO has achieved a long and illustrious reputation for its recordings and radio broadcasts. Since 1936, the PSO has been broadcast throughout the U.S., receiving increased national attention in 1982 through its series of network radio broadcasts by Public Radio International, produced by WQED-FM 89.3 in Pittsburgh. Starting with the release of its first commercial recording in 1941, the PSO has made hundreds of critically acclaimed recordings. They are available on the PentaTone, EMI, Angel, CBS, Philips, MCA, New World, Nonesuch, Sony Classical and Telarc labels, and now on Octavia's Exton label.

At home in historic Heinz Hall, the Pittsburgh Symphony Orchestra offers 24 weeks of classical subscription concerts annually, a Pops series of seven weekends, and the Fiddlesticks Family Concerts series. Numerous community engagement and partnership concerts are performed regularly throughout Western Pennsylvania, West Virginia and Maryland. The PSO also performs free, educational concerts in Heinz Hall for students and summer concerts in Allegheny County parks. In 2007, the Pittsburgh Symphony Orchestra became the first orchestra to receive

both the Bank of America and MetLife Awards for Excellence in Orchestra Education.

MANFRED HONECK (conductor)
Music Director of Pittsburgh Symphony Orchestra

In January 2007, after several highly successful guest appearances leading the Pittsburgh Symphony Orchestra, Manfred Honeck was appointed its ninth Music Director, and began this position at the start of the 2008-2009 season.

In addition to his appointment in Pittsburgh, Honeck was Music Director of the Swedish Radio Symphony Orchestra from 2000 to 2006, and in 2007, assumed the post as Music Director of the Staatsoper Stuttgart. Beginning in September 2008, Honeck became the Principal Guest Conductor of the Czech Philharmonic Orchestra in Prague.

In 1996, Honeck began a three-year stint as one of three main conductors of the MDR Symphony Orchestra Leipzig, and in 1997, he served as Music Director at the Norwegian National Opera in Oslo for a year. A highly successful tour of Europe with the Oslo Philharmonic marked the beginning of a close collaboration with this orchestra, which consequently appointed him Principal Guest

Conductor, a post he held from 1998-2004.

Manfred Honeck was born in Austria and studied music at the Academy of Music in Vienna. An accomplished violinist and violist, Honeck spent more than 10 years as a member of the Vienna Philharmonic and the Vienna State Opera Orchestra. It is his experience as an orchestra musician that heavily influenced his conducting and helped give it a distinctive stamp. Honeck commenced his conducting career as assistant to Claudio Abbado at the Gustav Mahler Youth Orchestra in Vienna. Subsequently, he was engaged by the Zurich Opera House from 1991-1996, where he was bestowed the prestigious European Conductor's Award in 1993.

As a guest conductor, Manfred Honeck has worked with such major international orchestras as the Deutsches Symphonie-Orchester Berlin, Gewandhausorchester Leipzig, Bavarian Radio Symphony Orchestra, Sächsische Staatskapelle Dresden, Royal Concertgebouw Orchestra, London Philharmonic Orchestra, Orchestre Philharmonique de Radio France, Czech Philharmonic, and the Vienna Philharmonic in Europe, and the Chicago Symphony Orchestra, Los Angeles Philharmonic, National Symphony Orchestra, and Boston Symphony Orchestra in the U.S.

In addition to his post at the Stuttgart Opera, other operatic engagements have led Honeck to guest conduct the Semperoper in Dresden, Komische Oper Berlin, Theatre de la Monnaie in Brussels and Royal Opera of Copenhagen, as well as the White Nights Festival in St. Petersburg and the Salzburg Festival. He appears regularly at Switzerland's

Verbier Festival, where he is scheduled to lead a concert performance of Mozart's Don Giovanni with an international cast in 2009. Honeck has also been Artistic Director of the "International Concerts Wolfegg" summer music series in Germany for more than fifteen years.

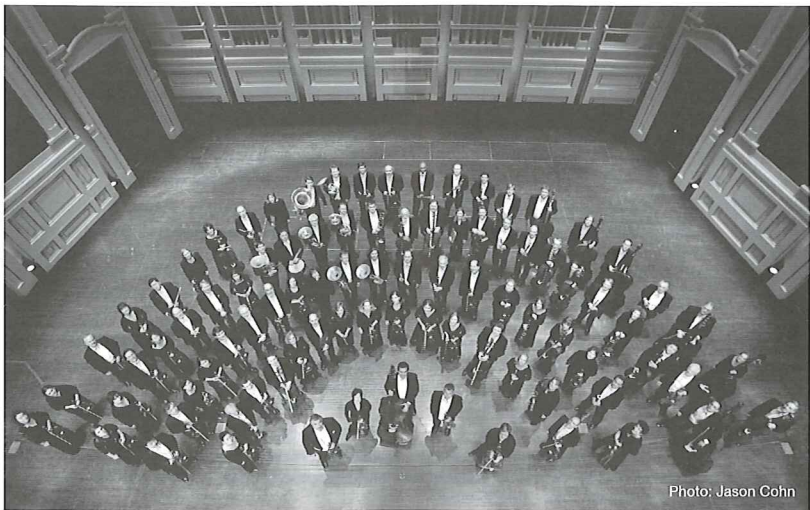


Photo: Jason Cohn

SACD<Super Audio CD>について



SUPER AUDIO CD

SACDはCDの開発者であるソニーとフィリップスによって共同開発された新世代のオーディオディスクです。音楽の感動を余すことなく伝えるために録音周波数帯域を100kHz近くまで拡張し、ダイナミックレンジもまた120dB以上（可聴帯域内）と大幅に広がっているため、自然界に存在する音のほとんど全てを捉えることが可能となりました。SACDでは、従来のPCM方式とは異なったDSD（Direct Stream Digital）と呼ばれる信号記録方式が採用されており、音楽信号のほとんど全てはもちろんのこと、演奏会場の空気感までも忠実に高い鮮度で再現することが可能です。

DSD<Direct Stream Digital>について

DSD

Direct Stream Digital

DSD方式では、アナログ音楽信号をデルタシグマ変調器で高速の1ビットのデジタル信号に変換し、この膨大な数の1ビット信号をそのまま記録します。つまり従来のCDなどに用いられたPCM方式の64倍もの繊細さが信号の波を、ハルスの疎密波として記録している方法です。それは、あたかも空気の疎密波である音楽信号波形をそのまま写し取ったような記録方法ともいえるでしょう。このアナログ信号に近いデジタル記録方式が音楽の空気感までも伝えることができる秘密なのです。

本ディスクについて

本ディスクは、マスターディスクの音をそのままディスクに収めるため、2chスーパーオーディオCD（SACD）の「非圧縮SACDハイブリッド・ディスク」を採用しております。これまでのSACD層の音声信号は、2chと5chという膨大な情報量を1枚のディスクに収めるため、DST（ダイレクタ・ストリーム・トランスファー：SACD用に開発されたロスレス音声圧縮方式）によって圧縮、再生時にプレーヤーによって解凍されてお客様の耳に届けられてきました。本ディスクはその圧縮解凍作業を省略することによって再生時のプレーヤーへの負担を削減、ついにはSACDが持つキャパシティを存分に引き出す事に成功しております。これまで以上のSACDによる最高音質をお楽しみ下さい。

HIGH QUALITY

HQ

Super Audio CD

EXTON STUDIO



本ディスクは、数々のSACD、DVD-Audioを手がけてきたオクタヴィア・レコードが考える理想の制作環境に形にした「EXTON STUDIO」で制作され、最良の音質及び音場感をお楽しみ頂けるものとなっております。

EXTON STUDIOの特徴

- サラウンドMIXでは定番モニターのGENELEC 1031Aを壁に埋め込んだ形で用いた、八角構造のスタジオで、2chのもよりマルチ・サラウンドに特化した音響特性を持つ制作環境。
- メインのPyramix SystemによるDSD48ch、PCM24ch(96kHz/24bit)の編集、ミキシング、マスタリングに対応したハイエンド・フルデジタル環境。
- 近年、欧州全域のスタジオ施工技術において高い評価を持つMediatronik社の設計によるスタジオデザインで、その素材の全てを欧州より直輸入。

●  and DSD are Trademarks.

● DSDの音はSACD対応プレーヤーでお楽しみください。尚、本品はCDレイヤーをあわせ持った二層構造の「ハイブリッド・ディスク」になっておりますので、通常のCDプレーヤーの多くのものでCD品質の音でお楽しみいただくことができます。また、DVDプレーヤーの場合は、CD対応となっている機種でもかからないものがありますので、あらかじめ御了承ください。詳しい再生上の取り扱い方については、ご使用になるプレーヤーごとの取り扱い説明書をご覧ください。

<取り扱ひ上のご注意> ●ディスクは両面共、指紋、汚れ、キズ等をつけないように取り扱って下さい。 ●ディスクが汚れたときは、メガネふきのような柔らかい布で内周から外周に向かって放射状に軽くふき取って下さい。レコード用クリーナーや溶剤等は使用しないで下さい。 ●ディスクは両面共、鉛筆、ボールペン、油性ペン等で文字や絵を書いたり、シール等を貼付しないで下さい。 ●ひび割れや変形、又は接着剤等で補修したディスクは、危険ですから絶対に使用しないで下さい。 ●保管上のご注意> ●直射日光の当たたる場所や、高温・多湿の場所には保管しないで下さい。 ●ご使用後、ディスクは必ずプレーヤーから取り出し、専用ケースに入れて保管して下さい。 ●ディスクケースの上にも重い物を置いたり、落としたりすると、ケースが破損し、ケガをすることがあります。

MAHLER

Symphony No.1 "Titan"

MANFRED HONECK

PITTSBURGH SYMPHONY ORCHESTRA

Recording Date: 26-28 Sep. 2008 (Live Recording)

Recording Location: Heinz Hall, Pittsburgh

Mixed and Mastered at EXTON Studio, Yokohama

Producer: Tomoyoshi Ezaki

Assistant Producer: Masako Teshima

Recording Director: Tomoyoshi Ezaki

Recording Engineer: Mark Donahue (sound/mirror)

Balance Engineer: Tomoyoshi Ezaki

Editor: Tomoyoshi Ezaki



EXCL-00026

EXTON

Hybrid

マーラー

GUSTAV MAHLER (1860-1911)

交響曲 第1番 二長調 「巨人」

Symphony No.1 in D major "Titan"

- | | | |
|---|---|-------|
| 1 | Langsam. Schleppend. Wie ein Naturlaut. | 17:14 |
| 2 | Kräftig bewegt, doch nicht zu schnell | 8:28 |
| 3 | Feierlich und gemessen, ohne zu schleppen | 11:16 |
| 4 | Stürmisch bewegt – Energisch | 21:01 |

ピッツバーグ交響楽団

PITTSBURGH SYMPHONY ORCHESTRA

マンフレッド・ホーネック (指揮)

MANFRED HONECK (conductor)

2008年9月26-28日 ピッツバーグ、ハインツ・ホールにて収録

Recording Date: 26-28 Sep. 2008 (Live Recording)

Recording Location: Heinz Hall, Pittsburgh

Mixed and Mastered at EXTON Studio, Yokohama

TOTAL TIME : 57:59

©©2009 EXTON Co., Ltd.

Made by EXTON Co., Ltd., Japan. Unauthorized reproduction prohibited.



SUPER AUDIO CD

DIGITAL AUDIO

Hybrid Layer Disc

C D

SACD STEREO

EXCL-00026

STEREO

[DDD]

DSD
RECORDING

このCDを、権利者の許諾なく貸
貸業に使用すること、ネットワーク
等を通じてこのCDに収録された
音を送信できる状態にすることを
禁じます。また、個人的に楽しむな
どの場合を除き、著作権法上、無
断複製は禁じられています。

[09-6-17] ©

Mahler: Symphony No.1 "Titan"
Manfred Honeck cond. Pittsburgh Symphony OrchestraEXTON
EXCL-00026マーラー：交響曲 第1番 「巨人」
マンフレッド・ホーネック (指揮)

ピッツバーグ交響楽団

EXTON
EXCL-00026